

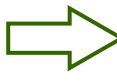
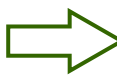


先月までの為替相場のレビューと、今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2016/01/04

## くすぶるECBの追加緩和観測

通貨ペア	基調		ページ数
<a href="#">ユーロ/円</a>		<b>三役逆転点灯で下向きの流れ</b> 予想レンジ: 126.100~132.400円	2-3
<a href="#">ユーロ/ドル</a>		<b>引き続き欧米の金融政策に注目</b> 予想レンジ: 1.05500~1.11000ドル	4-5
<a href="#">ポンド/円</a>		<b>ダブルパンチを警戒</b> 予想レンジ: 172.000~182.000円	6-7
<a href="#">ポンド/ドル</a>		<b>米・英金融政策が焦点</b> 予想レンジ: 1.43000 ~ 1.51500 ドル	8-9

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



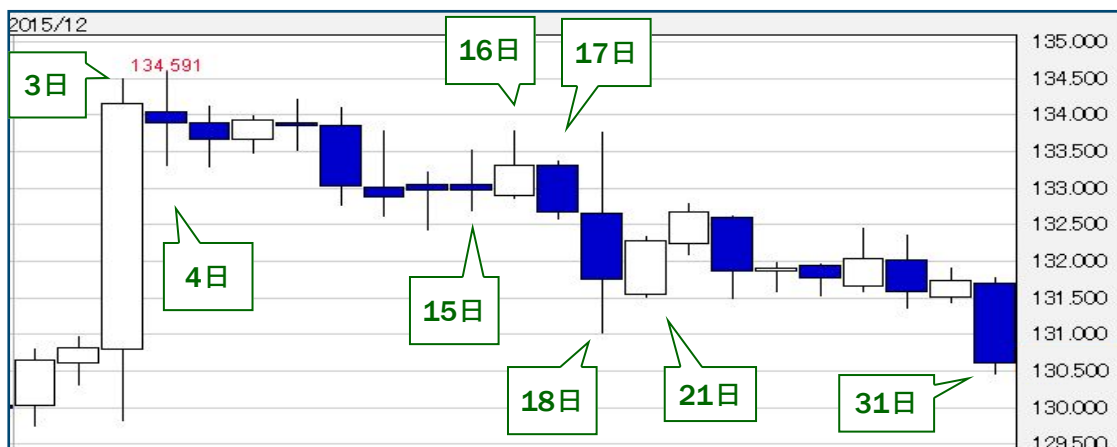
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2016 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

ユーロ/円 12月の推移

12月のユーロ/円相場は129.761~134.591円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.5%の上昇(ユーロ高・円安)となった。

欧州中銀(ECB)の追加金融緩和期待が高まる中、実際にECBが発表した内容が市場での期待に届かなかったという見方が浮上し、失望からユーロ買戻しが活発化すると、4日に134.591円まで急騰。その後は、日銀が発表した緩和策もまた失望を誘う内容であったため円買いが活発化し、18日は131円ちょうど前後まで急落。月末にかけては、月末・年末に絡んだドル買い・ユーロ売りの動きも重石となって一段安となり、ほぼ往って来いの展開となった。



四本値	
OPEN	130.031
HIGH	134.591
LOW	129.761
CLOSE	130.623

3日	欧州中銀(ECB)理事会直前に「ECB政策金利や中銀預金金利、限界貸出金利を据え置く」と一部で報じられた事を受け、ユーロが一時急騰した。その後ECBは中銀預金金利の引き下げ(-0.20%→-0.30%)を発表(政策金利と限界貸出金利は据え置き)。ドラギECB総裁が「資産買い入れプログラム(QE)を少なくとも2017年3月まで延長」「QEの資産買い入れで再投資を行う」「資産買い入れ対象を地方債まで拡大」などと発言した。資産買い入れ額が600億ユーロで据え置かれるなど市場での期待に届かなかったという見方から、ユーロ買戻しが加速すると、ユーロ/円は134.498円まで上昇した。
4日	NYダウ平均の堅調推移を受けてユーロ/円は134.591円まで値を上げるも、ドラギECB総裁が「ユーロ圏のインフレ率はECBの目標より低い」「ECBは必要なら一段の措置を講じる」「バランスシートの規模に特に制限はないと見ている」などと発言すると133.50円台まで反落した。
15日	独12月ZEW景気期待指数が16.1と市場予想(15.0)を上回り、ユーロ買いが優勢となる場面が見られた。
16日	欧州各国の12月PMI・速報が発表され、製造業部門は仏が51.6、独が53.0、ユーロ圏が53.1と軒並み予想(50.6、52.8、52.8)を上回ったが、米連邦公開市場委員会(FOMC)を控えて反応薄であった。
17日	独12月Ifo景況感指数が108.7と予想(109.0)を下回ったが、ユーロ相場の反応は限定的であった。
18日	日銀は金融政策決定会合で「量的・質的緩和を補完するための諸措置」を決定し、長期国債買入れの平均残存期間を拡大、指数連動型上場投資信託(ETF)の買入れ枠を新設、不動産投資信託(J-REIT)の買入れ限度枠拡大等を発表した。直後は円売りが強まり、ユーロ/円は133.773円まで急伸したが、その後はETFの新設枠が3000億円に留まった点などが「小出しの追加緩和」と受け止められ、日経平均が下落に転じると共に反落した。
21日	20日に実施されたスペイン総選挙の結果が明らかとなり、与党・国民党が第1党となるも過半数には達しなかった。もっとも、事前予想ではどの党も単独過半数には達しない事が予想されていたため、ユーロ相場の反応は限定的であった。
31日	NYダウ平均が軟調に推移した事や、月末・年末のロンドンフィキシング(日本時間25時)に向けたドル買いを受けてユーロ/ドル相場がユーロ売りが優勢となった事から、ユーロ/円は一時130.472円まで下落した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

# EUR/JPY

## 日経平均

OPEN	19799.08
HIGH	20012.40
LOW	18562.51
CLOSE	19033.71

## 独 D A X

OPEN	11422.47
HIGH	11430.38
LOW	10122.95
CLOSE	10743.01

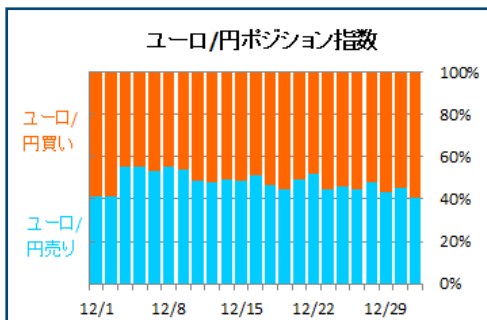
## 独2年債利回

OPEN	-0.415%
HIGH	-0.281%
LOW	-0.454%
CLOSE	-0.345%

## 独10年債利回

OPEN	0.475%
HIGH	0.737%
LOW	0.447%
CLOSE	0.629%

## 12月のポジション動向



## 1月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)

- ・12月ユーロ圏消費者物価指数・速報値 (5日)
- ・12月米雇用統計(8日)
- ・スペイン新議会招集(13日)
- ・12月中国貿易収支(13日)
- ・12月米小売売上高(15日)
- ・中国7-9月期GDP(19日)
- ・1月独ZEW景気期待指数(19日)
- ・欧州中銀金融政策発表(21日)
- ・1月独/ユーロ圏製造業PMI・速報 (22日)
- ・1月独Ifo景況感指数(25日)
- ・米FOMC政策金利発表(26-27日)
- ・日銀金融政策決定会合(28-29日)
- ・1月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(29日)

## 1月の見通し

1月はECB理事会が予定されており、その前哨戦として、12月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(5日)に着目したい。原油安が欧州の低インフレの長期化を招いており、先月のECB理事会後も原油相場は軟調に推移している。予想を下回るインフレ率となればECB理事会で追加金融緩和観測が浮上する可能性がある。その場合はユーロ/円相場の重石となるだろう。

テクニカル面では昨年11月安値(129.670円)を割ると下値余地が拡大する可能性が高い。128.498円(2012年安値94.100円-2014年高値149.760円の上げ幅38.2%押し)付近で下げ止まらない場合、126.093円(昨年4月安値)に向けた一段安も考えられる。一目均衡表を見ると、日足・週足で三役逆転が点灯している。したがって、足元の流れを変えるほどの材料が出ない限り、戻りが出ても一時的となるだろう。(川畑)

(予想レンジ: 126.100~132.400円)

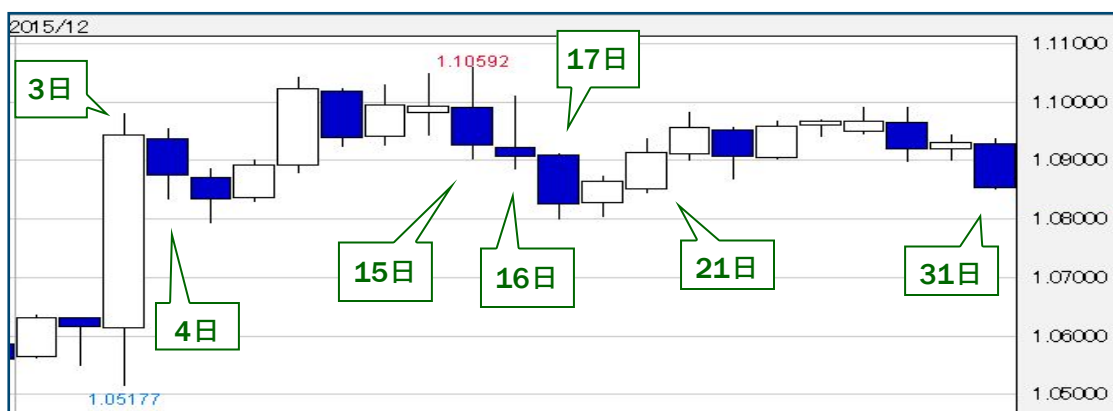
## ユーロ/ドル 12月の推移

EUR/USD

12月のユーロ/ドル相場は1.05177～1.10592ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約2.8%の上昇(ユーロ高・ドル安)となった。

欧州中銀(ECB)の追加金融緩和期待が高まる中、実際にECBが発表した内容が市場での期待に届かなかったという見方が浮上し、失望からユーロ買戻しが活発化。3日のユーロ/ドルの値幅は450ポイント超に達し、2015年で最大の上昇となった。それだけ、失望感が強かった事が伺える。

その後は米連邦公開市場委員会(FOMC)やスペイン総選挙など重要な経済イベントが相次ぐも、いずれも反応は限られ、高止まりした。



## 四本値

OPEN	1.05658
HIGH	1.10592
LOW	1.05177
CLOSE	1.08555

3日	ECB理事会直前に「ECBは政策金利や中銀預金金利、限界貸出金利を据え置く」と一部で報じられた事を受け、ユーロが一時急騰した。その後ECBは中銀預金金利の引き下げ(-0.20%→-0.30%)を発表(政策金利と限界貸出金利は据え置き)。ドラギECB総裁が「資産買い入れプログラム(QE)を少なくとも2017年3月まで延長」「QEの資産買い入れで再投資を行う」「資産買い入れ対象を地方債まで拡大」などと発言。資産買い入れ額が600億ユーロで据え置かれるなど、市場予想を下回る緩和策が発表された事から、ユーロ買戻しが加速すると、ユーロ/ドルは1.09809ドルまで急騰した。
4日	ドラギECB総裁が「ユーロ圏のインフレ率はECBの目標より低い」「ECBは必要なら一段の措置を講じる」「バランスシートの規模に特に制限はないと見ている」などと発言。ユーロ/ドルは1.08359ドルまで下落した。
15日	独12月ZEW景況期待指数が16.1と市場予想(15.0)を上回り、ユーロ買いが優勢となる場面が見られた。
16日	欧州各国の12月PMI・速報が発表され、製造業部門は仏が51.6、独が53.0、ユーロ圏が53.1と軒並み予想(50.6、52.8、52.8)を上回ったが、米FOMCを控えて反応薄であった。米FOMCは市場予想通り政策金利の引き上げ(0.00~0.25%→0.25~0.50%)を決定。FOMCメンバーの2016年末時点でのFF金利見通しの中央値について、市場では0.25%の利上げが2~3回との見方が強かったが、1.375%(0.25%の利上げ4回程度に相当)と9月時点から変わらなかった。その後の米連邦準備制度理事会(FRB)のイエレン議長は会見で「利上げのペースはデータ次第」「緩やかな利上げは機械的で均等なタイミングを意味していない」とするも、「FRBの行動は異例の期間の終わりを示す」「賃金上昇加速の初期の兆候が見られる」など米経済は緩やかなペースで将来の利上げに耐えられる強さを備えているとの見方が示された。これらを受け、ユーロ/ドルは乱高下となった。
17日	独12月Ifo景況感指数が108.7と予想(109.0)を下回ったが、ユーロ相場の反応は限定的であった。
21日	20日に実施されたスペイン総選挙の結果が明らかとなり、与党・国民党が第1党となるも過半数には達しなかった。もっとも、事前予想ではどの党も単独過半数には達しない事が予想されていたため、ユーロ相場の反応は限定的であった。
31日	月末・年末のロンドンフィキシング(日本時間25時)に向けてドル買いが優勢となり、ユーロ/ドル相場でユーロ売り・ドル買いが強まると、一時1.0850ドル台まで下落した。



## EUR/USD

## NYダウ平均

OPEN	17719.72
HIGH	17901.58
LOW	17116.73
CLOSE	17425.03

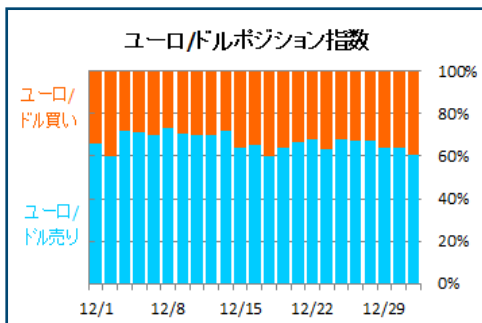
## 独10年債利回

OPEN	0.475%
HIGH	0.737%
LOW	0.447%
CLOSE	0.629%

## 米10年債利回

OPEN	2.2130%
HIGH	2.3563%
LOW	2.1183%
CLOSE	2.2694%

## 12月のポジション動向



## 1月の注目ポイント

## 月間指標カレンダー(外部リンク)

- ・12月中国財新/製造業PMI(4日)
- ・12月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(22日)
- ・12月米雇用統計(8日)
- ・12月中国貿易収支(13日)
- ・12月米小売売上高(15日)
- ・1月独ZEW景気期待指数(19日)
- ・欧州中銀金融政策発表(21日)
- ・1月独/ユーロ圏製造業PMI・速報(22日)
- ・1月独Ifo景況感指数(25日)
- ・米FOMC政策金利発表(26-27日)
- ・ポルトガル大統領選(24日)
- ・1月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(29日)

## 1月の見通し

1月は前月に続き、ユーロ圏・米国で発表される金融政策発表に注目したい。

先月のECB理事会については、予想を下回る緩和策だったが、裏を返すと緩和策を温存したとも考えられる。ECB理事会後もNY原油が軟調に推移しており、欧州の低インフレの長期化を招いている。したがって、5日のユーロ圏12月消費者物価指数・速報値が予想を下回る伸びとなる場合は、ECB追加金融緩和が浮上しやすいと見る。

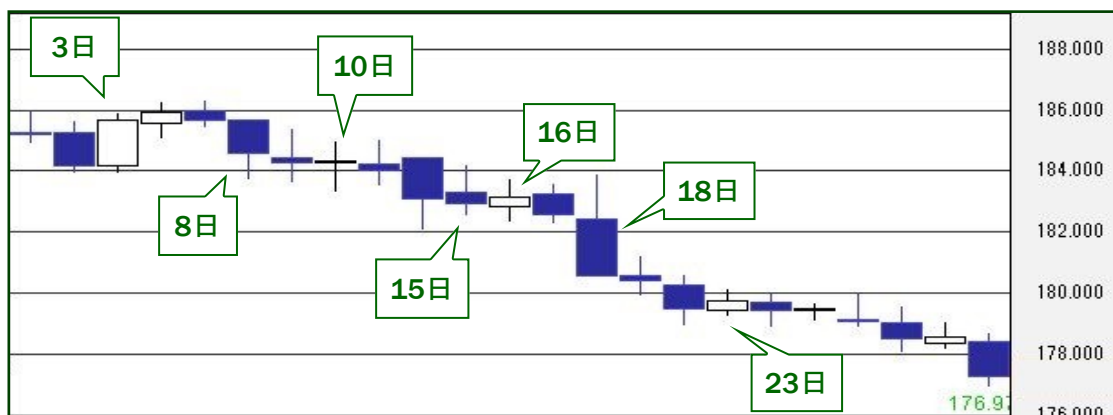
他方、今回のFOMCでは金利据え置きがコンセンサスとなっており、市場の関心は2016年の利上げペースに集まっている。前回FOMCで年4回相当との見方が示されており、この見方に変更がなければ3月利上げ期待が高まり、ドル買いが強まってユーロ/ドル相場の重石となりそうだ。

なお、スペイン政局について、執筆時でも新政権が誕生しておらず、引き続き連立交渉の行方を注視する事となろう。同国の政局混乱について、今のところ金利市場への影響は限定的となっている。左派のポデモスを除き主要政党はカタルーニャ州の独立に反対しているため、左派的運動が国内外で広がる可能性が低い点が挙げられる。(川畑)

(予想レンジ: 1.05500~1.11000ドル)

ポンド/円 12月の推移

12月のポンド/円相場は176.973~186.339円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約4.3%の大幅な下落(ポンド安・円高)となった。上旬こそ186円台に顔を出す場面も見られたが、その後はほぼ一貫して下落し、31日には一時177円台を割り込んで8カ月ぶり安値に沈んだ。ポンド/円の大幅下落は、原油安(NY原油先物は21日に約7年ぶりの安値となる33.98ドルまで下落)の影響が大きかった。原油安は、資源株主導で世界的に株価の下落基調を強めるとともに、世界的に低インフレ基調が続くとの見方を強めた。これらはポンド/円にとって、円高とポンド安の両面からダブルパンチとなった格好だ。



四本値	
OPEN	185.305
HIGH	186.339
LOW	176.973
CLOSE	177.314

3日	欧州中銀(ECB)の追加緩和(中銀預金金利を-0.30%に引き下げたものの、資産買入れ規模を月600億ユーロに維持)を期待外れとしてユーロが急騰した動きに連れてポンドも上昇した。英11月サービス業PMIが55.9と予想(55.0)を上回った事もポンドの追い風となった。
8日	本邦7-9月期国内総生産(GDP)・二次速報が前期比年率+1.0%と一次速報(-0.8%)から大幅に上方修正されると円買いが先行した。その後も、欧米市場で原油安・株安が進む中、円高・ポンド安が加速。なお、英10月鉱工業生産は前月比+0.1%と予想通りの伸びとなった。
10日	BOEは政策金利と資産買入れプログラムの規模を、それぞれ0.50%と3750億ポンドに据え置くと発表。同時に公表した金融政策委員会(MPC)議事録では、政策金利の据え置きを8対1で、資産買入れプログラムの据え置きは全員一致で決定した事が明らかとなった。また、「利上げは経済指標次第」としながらも「インフレ率は来年の第2四半期まで1%を下回る見通し」「現在は、経済に逆風が吹いている」などと弱気な見方を示した事からポンド売りがやや強まった。
15日	英11月消費者物価指数は前月比±0.0%、前年比+0.1%(予想:-0.1%、+0.1%)、同生産者物価指数は前月比-0.2%、前年比-1.5%(予想:-0.1%、-1.3%)であった。また、カーニーBOE総裁は英紙のインタビューで「政策金利引き上げを正当化するために不可欠な経済環境はまだ整っていない」との認識を示した。
16日	英11月雇用統計は失業率が2.3%、失業者数が前月比0.39万人増となった(予想:2.3%、0.08万人増)。また、8-10月の週平均賃金は前年比+2.4%と予想(+2.5%)をわずかに下回った。これを受けて小幅にポンドが売られる場面もあったが、米連邦公開市場委員会(FOMC)が利上げの発表とともに、先行きについてややハト派的な姿勢を示した事から、米国株が上昇したため円売りが強まり、結果的にポンド/円は小幅高となった。
18日	日銀は、金融政策決定会合で「量的・質的緩和を補完するための諸措置」を決定。長期国債買入れの平均残存期間を7-12年に拡大、指数連動型上場投資信託(ETF)の買入れ枠3000億円を新設、不動産投資信託(J-REIT)の銘柄別買入れ限度枠を10%に拡大する事などを発表した。これを受けて一旦円売りが強まったが、市場が補完措置の内容を消化するに連れて円を買い戻す動きが活発化した。黒田日銀総裁が、補完措置について「資産買入れの円滑化と緩和効果の浸透のため」の措置であり、「下振れリスクに対応する追加緩和ではない」などと述べた事も円買いを誘った。
23日	英7-9月期GDP・確報は前期比+0.4%、前年比+2.1%と速報(+0.5%、+2.3%)から下方修正された。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

## GBP/JPY

## 日経平均

OPEN	19799.08
HIGH	20012.40
LOW	18562.51
CLOSE	19033.71

## FTSE100

OPEN	6356.09
HIGH	6447.34
LOW	5871.88
CLOSE	6242.32

## 英2年債利回

OPEN	0.615%
HIGH	0.700%
LOW	0.549%
CLOSE	0.651%

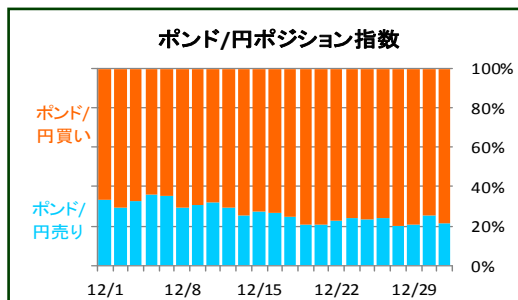
## 英10年債利回

OPEN	1.836%
HIGH	2.000%
LOW	1.722%
CLOSE	1.960%

## 12月のポジション動向

## 1月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)



- ・12月英製造業PMI(4日)
- ・12月英建設業PMI(5日)
- ・12月英サービス業PMI(6日)
- ・11月英貿易収支(8日)
- ・11月日本国際収支(12日)
- ・11月英鉱工業生産(12日)
- ・BOE政策金利発表/議事録(14日)
- ・12月英生産者物価指数(19日)
- ・12月英消費者物価指数(19日)
- ・12月英雇用統計(20日)
- ・12月英小売売上高(22日)
- ・10-12月期英GDP・速報値(28日)
- ・日銀金融政策決定会合(28-29日)
- ・12月日本消費者物価指数(29日)

## 1月の見通し

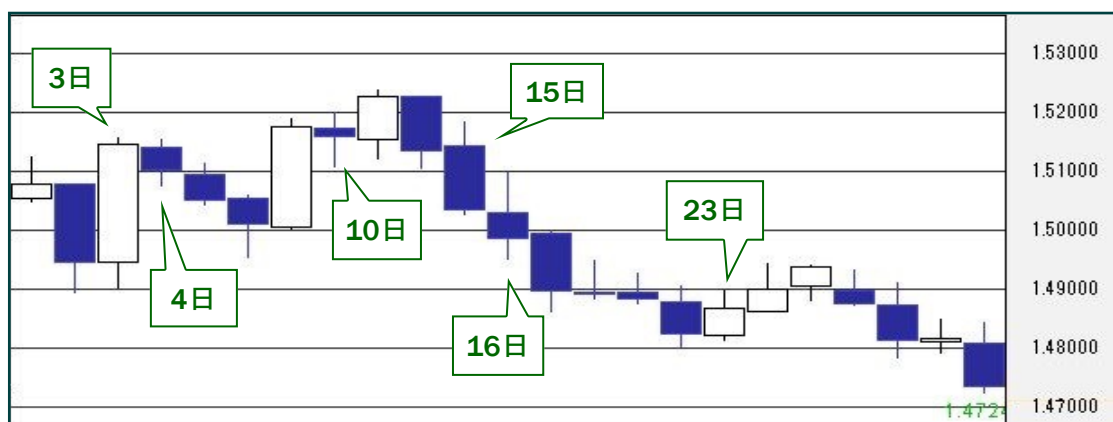
ポンド/円は、1月4日の東京市場で175.80円前後まで下落しており、昨年4月に付けた年初来安値(174.870円)を視界に捉えた。昨年安値を下抜ければ、次なる下値の目処が170円割れまで遠ざかる事になるため175円前後は重要な下値ポイントとなる。相場底割れか、あるいは底割れ回避か、そのカギは引き続き原油安・株安などによるリスク回避ムードの継続性と、英中銀(BOE)による利上げ先送り観測にある。昨年12月のように、原油安を起点とするリスク回避の動きは、BOEの利上げ先送り観測に繋がる事が多いため、特に注意が必要だろう。BOEの利上げ開始時期を巡っては、14日のBOEの金融政策委員会(MPC)議事録や19日に発表される12月の英インフレ指標の結果が注目を集めそうだ。大幅下落の後だけに、これらを経て年内利上げの期待が再浮上すれば、ポンド/円の戻り余地は大きそうだ。少なくとも昨年11月高値(188.812円)からの下落に対する半値戻しに当たる182円台前半までは反発が期待できよう。(神田)

(予想レンジ: 172.000~182.000円)

## ポンド/ドル 12月の推移

GBP/USD

12月のポンド/ドル相場は1.47240～1.52396ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約2.1%の下落(ポンド安・ドル高)となった。カーニー英中銀(BOE)総裁は2015年7月に「政策金利に関する決定が年末年始前後にもっとはっきりしてくる」と述べていたが、BOEの利上げ開始時期については依然として不透明な状況にある。一方で、米連邦準備制度理事会(FRB)は9年半ぶりの利上げに踏み切るなど、金融政策の温度差が為替レートに表れた格好で、約8カ月半ぶりの低水準までポンド安・ドル高が進んだ。



## 四本値

OPEN	1.50554
HIGH	1.52396
LOW	1.47240
CLOSE	1.47370

3日	欧州中銀(ECB)の追加緩和(中銀預金金利を-0.30%に引き下げたものの、資産買入れ規模を月600億ユーロに維持)を期待外れとしてユーロが急騰した動きに連れてポンドも上昇した。英11月サービス業PMIが55.9と予想(55.0)を上回った事もポンドの追い風となった。
4日	米11月雇用統計は失業率が予想通りの5.0%、非農業部門雇用者数が前月比21.1万人増と予想(20.0万人増)をわずかに上回った。また、平均時給も前月比+0.2%と予想通りであった。米国の12月利上げが確定的になったとしてドル高・ポンド安に振れる場面もあったが、12月利上げは既に織り込み済みとの見方からドルが失速するなど方向感が定まらなかった。
10日	BOEは政策金利と資産買入れプログラムの規模を、それぞれ0.50%と3750億ポンドに据え置くと発表。同時に公表した金融政策委員会(MPC)議事録では、政策金利の据え置きが8対1、資産買入れプログラムの据え置きは全員一致で決定した事が明らかとなった。また、「利上げは経済指標次第」としながらも「インフレ率は来年の第2四半期まで1%を下回る見通し」「現在は、経済に逆風が吹いている」などと弱気な見方を示した事からポンド売りがやや強まった。
15日	英11月消費者物価指数は前月比±0.0%、前年比+0.1%(予想:-0.1%、+0.1%)、同生産者物価指数は前月比-0.2%、前年比-1.5%(予想:-0.1%、-1.3%)であった。また、カーニーBOE総裁は英紙のインタビューで「政策金利引き上げを正当化するために不可欠な経済環境はまだ整っていない」との認識を示した。
16日	英11月雇用統計は失業率が2.3%、失業者数が前月比0.39万人増となった(予想:2.3%、0.08万人増)。また、8-10月の週平均賃金は前年比+2.4%と予想(+2.5%)をわずかに下回った。その後、米連邦公開市場委員会(FOMC)が政策金利であるFF金利の誘導目標を0.25-0.50%に引き上げた。FOMCは声明で「経済状況は緩やかな利上げのみを正当化」「満期資産への再投資は利上げが十分に進むまで継続」などとややハト派的な見解を示した。また、イエレン米連邦準備制度理事会(FRB)議長は、「労働市場は明らかに一段の改善を見せている」「5%の失業率は長期的レベルの中央値に近い」「賃金の伸びが持続的に上向くのはまだこれから」などと米経済の先行きにやや楽観的な見方を示した。これらを受けてポンド/ドルは乱高下したが、最終的にはポンド安・ドル高方向に落ち着いた。
23日	英7-9月期GDP・確報は前期比+0.4%、前年比+2.1%と速報(+0.5%、+2.3%)から下方修正された。



## GBP/USD

## NYダウ平均

OPEN	17719.72
HIGH	17901.58
LOW	17116.73
CLOSE	17425.03

## 米10年債利回

OPEN	2.2130%
HIGH	2.3563%
LOW	2.1183%
CLOSE	2.2694%

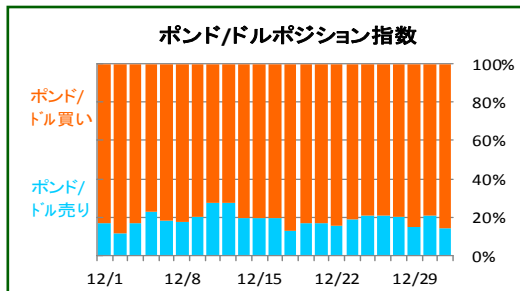
## 英10年債利回

OPEN	1.836%
HIGH	2.000%
LOW	1.722%
CLOSE	1.960%

## 12月のポジション動向

## 1月の注目ポイント

## 月間指標カレンダー(外部リンク)



- ・12月英製造業PMI(4日)
- ・12月米ISM製造業景況指数(4日)
- ・12月英サービス業PMI(6日)
- ・12月米ISM非製造業景況指数(6日)
- ・FOMC議事録(6日)
- ・12月米雇用統計(8日)
- ・11月英鉱工業生産(12日)
- ・BOE政策金利発表/議事録(14日)
- ・12月米小売売上高(15日)
- ・12月英消費者物価指数(19日)
- ・12月米消費者物価指数(20日)
- ・12月英雇用統計(20日)
- ・12月英小売売上高(22日)
- ・米FOMC(26-27日)
- ・10-12月期英GDP・速報値(28日)
- ・10-12月期米GDP・速報値(29日)

## 1月の見通し

市場には、米連邦公開市場委員会(FOMC)の利上げは緩やかなペースでしか進まず、ドルの上値は限られるとの見方が根強い。しかし、その一方で英金融政策委員会(MPC)の年内利上げは困難との見方が浮上しており、ポンドの重石となっている。当面は、米・英の金融政策がポンド/ドル相場の焦点であり続けそう。

米FOMCは26-27日の会合では利上げを見送る公算だが、3月の追加利上げを巡って見方が別れている。利上げ観測が高まればドル高(ポンド安)に振れやすく、3月も利上げを見送るとの見方が強まればドル安(ポンド高)に繋がりやすい。FOMC以外にも、6日のFOMC議事録や8日の米12月雇用統計、29日の米10-12月期国内総生産(GDP)・速報値などが追加利上げに関する思惑を左右しそう。

英中銀(BOE)の利上げについては、14日のBOEのMPC議事録(利上げ賛成票の数など)や19日の英12月消費者物価指数(同日に生産者物価指数も発表される)の他、20日の英12月雇用統計(平均賃金の伸び率など)が焦点となろう。これらを経て年内利上げ期待が再燃すれば、ポンド高(ドル安)が見込める一方、BOEが想定している利上げ開始時期(2017年1-3月期)に沿って、市場の利上げ期待が一段と後退すれば、一段のポンド安(ドル高)圧力が掛かるだろう。(神田)

(予想レンジ: 1.43000~1.51500ドル)